博士（文　学）　尹　　相　実

学位論文題名

現代日本語判断系モダリティの記述的研究
——文末形式分析を通して——

学位論文内容の要旨

本論文は、話し手の判断をめぐる、いわゆる判断系モダリティの全体像の解明を目指し、主に文末形式の分析を通して考察したものである。

第 1 章「序論」で、先行研究を整理し、課題の設定と記述分析の方法論が述べられている。

第 2 章「モダリティ論素描」で、モダリティ論全般にわたっての概要を述べるために、文末、従属句末・連体句内、文頭・句頭という、文中に現れる位置と機能による主モダリティ、副モダリティ、従モダリティの検討を行い、文末形式に託されるモダリティの階層性の分析をしている。

第 3 章「判断系モダリティ」で、2 種 6 類の下位類型の設定の手順と根拠、所属の代表形式を提示、その妥当性を裏付けるために、実際の資料に当たって複合型の文末形式の出現状況を調査分析している。

第 4 章「非確言系のモダリティ」で、「ダロウ」「ヨウダ」「ラシイ」「ソウダ」の比較・分析をしている。話し手が何らか（無い場合を含む）の知識・情報をよりどころにして命題の作成や判定を試みることを示す形式として一括できるが、話し手が命題作成や判定のよりどころを持っているか否か、そのよりどころの存在が強調されているかどうか、またよりどころになる知識・情報が外的なものか話し手の内的なものかなどによって区別される、としている。

第 5 章「蓋然性表明型の判断モダリティ」で、「カモシレナイ」「ニチガイナイ」を扱い、話し手が想定している命題成立の蓋然性を明示的に表すモダリティとして一括し、「ニチガイナイ」は、ある命題が真である蓋然性を持ち、しかもその蓋然性が高いことを示す有標形、「カモシレナイ」は、ある命題が真である蓋然性を持つことだけを示し、その蓋然性の度合いの高低については別に関与しないことを示す無標形として対立する、としている。

第 6 章「説明型の判断モダリティ」で、「モノダ」「コトダ」「ノダ」を扱い、命題内容に対する話し手の真偽判断を表し、その真がどのようなものかについての話し手の説明の態度を示すモダリティとして一括し、「モノダ」と「コトダ」は命題内容を＜一般的な真＞と認めるか否かによって区別され、レベルの異なる「ノダ」とは命題を作る事柄間の関係成立を真と認める＜関係認定性＞の有無を以て対立する、としている。

第 7 章「推論型の判断モダリティ」で、「ハズダ」「ワケダ」を扱い、命題内容に対する話し手の真偽判断に推論過程が含まれることを明示的に示すモダリティとして一括し、「ハズダ」が前提の事柄 P から導き出される Q の成立自体が真であるとの推論過程を含むのに対して、「ワケダ」は事柄 P と Q の関係成立が真であるとの推論過程を含む点で区別される、としている。

第 8 章「価値認定型の判断モダリティ」で、「ベキダ」「ホウガイイ」「ナケレバナラナイ」を扱い、命題内容に対する話し手の価値判断を表すモダリティとして一括し、「ベキダ」と「ホウガイイ」は命題内容に対する話し手の＜妥当性判断＞を、「ナケレバナラナイ」は＜必要性・必然性判断＞を表す、とし、前の二者はその妥当性が絶対的か相対的かによって区別される、としている。

第 9 章「結語」で、モダリティ表現は最終的に話し手の自分の発話に対する責任の問題に帰されることの言語的具現であることが、整理して述べられている。

学位論文審査の要旨

主　査　　教　授　　石　塚　晴　通
副　査　　教　授　　宮　澤　俊　雅
副　査　　教　授　　門　脇　誠　一
副　査　　教　授　　小　野　芳　彦
副　査　　助教授　　金　水　　敏（大阪大学）

学位論文題名

現代日本語判断系モダリティの記述的研究
——文末形式分析を通して——

日本語モダリティの研究は、比較的新しい研究分野であり、先行研究の蓄積も不十分で諸説の定着も見られない現状の中で、本論文は実用例を豊富に採集して丁寧な分析記述を全面的に行うという、極めてオーソドックスな方法を取り、安定した成果を上げている。

日本語の判断系モダリティの形式は、非判断系モダリティに比して数量的にも豊富であり、個々の形式の意味用法が多岐に分かれる為に相当複雑な構造となっているが、本論文は、モダリティ的意味による下位カテゴリーを設定して、意味を担う代表的形式について丁寧な記述分析を行い、各モダリティ形式が同類型の中でどのような点で一括でき、またどのような点で対立するかを明らかにすることに成功している。

モダリティ表現は最終的に話し手の自分の発話に対する責任の問題に帰されることの言語的具現であり、

(1) 話し手が自分を取り巻く客体世界の事柄を認識して判断を下す時に、どのような態度を取るかの選択の具現
(2) 話し手は前項の選択に際して、より客観的態度を取るか、より内省的態度を取るかの選択の具現

と実用例を豊富に採集して分析、結論づけており、当分野における研究成果として高く評価し得る。

中でも、第 4 章「非確言系のモダリティ」で、「ダロウ」「ヨウダ」「ラシイ」「ソウダ」の意味・用法を整理する際に設定された「命題の作成者（情報源）」と「命題の判定者」の区別などは、今後のモダリティ研究に影響を与え得る有効な概念であると認められる。

本論文が論文博士としての学位申請論文であり、主査を初めとする審査員の専門分野を配慮して、モダリティ研究の専門家として加えられた外部審査委員からも、高い評価報告を得ている。

以上により、本委員会は、本論文の著者尹　相実氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。